

2019年度  
東京視察報告書

# はじめに

この報告書は、2019年度もうひとつの放課後探しプロジェクトのもうひとつの放課後探しプロジェクト大学生サポートメンバー（以下カゴメン）研修の一環として行われた東京での視察の記録をまとめたものです。

今回東京で、2019年12月14日に3か所の団体や施設を訪問しお話を伺ってきました。

今回の視察の目的は実際にユースセンターをまわり、ユースワーカーさんと話すことでユースワークについての理解を深め、放プロの活動に生かすことです。

実際にユースセンターで働く職員の方々にどのようなことに気をつけて中高生と接しているのか、関わっているのかについてお話を聞きました。その中で、自分たちの活動に足りないものや続けていかねばならないものを学ぶことができました。また、同じ分野に関わり続けている方々と繋がりをもつことができたのも大きな収穫でした。今回の視察ではYECのOBであり、b-labの職員でもある山本晃史さんにYECの先輩として親身な立場で多くのアドバイスを頂くことが出来ました。これからもぜひ今回見学をさせて頂いた施設の方々と交流を続けていけたらと思います。

最後に今回視察させていただいた世田谷区立希望丘青少年交流センターの下村様、喫茶ランドリーの大西様、今回の東京視察のコーディネート相談に乗ってくださったb-labの山本様、私たちを快く迎えてくださった施設先の皆様、今回の視察に協力して頂いた全ての方々にこの場を借りて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

# 視察概要

## ◆ 視察の目的

- ・ユースセンターに行き、行っている活動を学ぶ
- ・放プロに大切なユースワークについて学ぶ
- ・ユースワーカーの方と繋がりをもつ

## ◆ 視察の概要

### ◇ 日時

2019年12月14日(土)

### ◇ 参加者

土橋もも (YEC、2年)

大津萌の香 (YEC、1年)

関文菜 (YEC、1年)

西尾圭織 (YEC、1年)

松本成海 (YEC、1年)

森俊輔 (YEC、1年)

八木健斗 (YEC、1年)

安達樹璃愛 (YEC、1年)

木内あすか (放プロカゴメン、1年)

### ◇ 訪問先

- ・世田谷区立希望丘青少年交流センター
- ・喫茶ランドリー
- ・ビーラボ (b-lab)

# 世田谷区立希望丘青少年交流センター

日時：2019年12月14日

場所：東京都世田谷区船橋6-25-1-3F

先方：下村一（しもむらはじめ）様

当方：視察メンバー一同

電話：03 - 6304 - 6915

メール：info@ups-s.com

HP：<https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/kusei/012/008/005/d00164904.html>

概要：平成30年2月に、公募による若者（26名）と地域の関係団体の代表者（22名）による「運営準備委員会」を設置し、利用ルールやプログラム、地域ネットワークの構築、施設愛称の公募などの検討を進めてきました。開設後には「運営委員会」として、施設を利用する若者の意見なども積極的に取り入れながら、若者と地域との連携・協力による施設運営の中核を担っています。

（施設ホームページより）

施設概要：

多目的スペース：コンセプトは「誰もが安心して、自分らしく過ごすことができる空間」 一人でいながらも、他の若者の事も感じられる空間になるようにインテリアを配置。畳のコーナー、ウレタンマットを敷いたスペースなど足を伸ばして、ゴロゴロできる場所も設ける。調理室とは透明のスライディングウォールで区切られており、一体利用可。



交流スペース：若者たちと地域の人々の交流の場。漫画、ボードゲームがある。Wi-Fi、コンセントがある。ゲームをやる人が多い。若者の要望からハイカウンター席も設置。飲食物持ち込み可

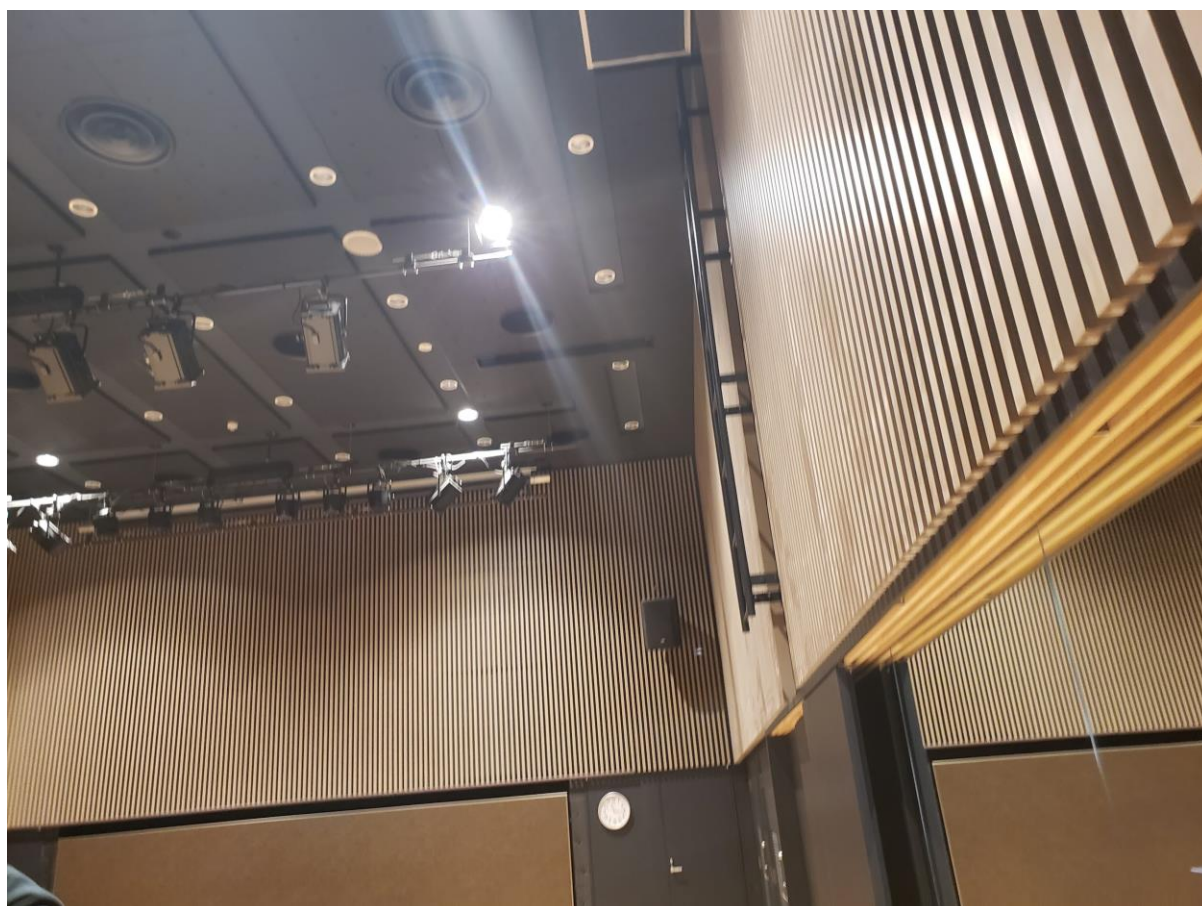




カフェキッチン:交流スペースの一角にある。高校生就労体験もできる



多目的ホール:卓球、ダンス、発表などを行える。ステージ、照明室がある。



音楽スタジオ：中高生～39歳まで利用できる。ネットで予約して利用。ギター・ベースの貸出も行っている。おもにバンドの練習、楽器の練習、カラオケに使われている。



調理室：毎週木曜日にみんなでご飯を作って食べる楽しい食卓プロジェクトを開催している。団体予約やアップスのイベントの催しがないときは自由に使える。



学習室：中高生中心、小学生は利用できない。試験前は特に利用者が多い。中高生の要望からアップス模試も開催。





テラス：野菜を栽培している。収穫した野菜はイベントで使ったり、料理プロジェクトで使っている。



設立の背景：これまで、若者が主体的に活動できる場所や、気軽に立ち寄れる居場所、そして、若者たちが地域とつながり、世代を超えた交流を推進する拠点として、「野毛青少年交流センター」と「青少年交流センター池之上青少年会館」の2か所の青少年交流センターを運営してきた。平成31年2月、旧希望丘中学校の跡地を活用した「希望丘複合施設」の開設に併せ、区内3か所目となる青少年交流センターとなる「希望丘青少年交流センター」が開設した。(施設ホームページより)

#### 活動①：楽しい食卓プロジェクト

毎週木曜日に参加者みんなで協力して食事を作り、みんなで食べる。メニューも自分たちで考え、入り口でアンケート投票をして決める。プロジェクトは食材の買い出しから参加者で始める。幅広い世代と交流でき、食を通じて仲良くなれる。参加費は200円。(月一で100円dayがある)単なる食事提供ではなく、このプロジェクトを通して自立できる力を身につける。そのため、なるべく作りやすい簡単な方法で作っている。全員が役割を持つために料理を作れなかった子はお皿洗いをする。

#### 活動②：世田谷大人図鑑

いろいろな世田谷区にゆかりのある大人が参加者と一緒に話をする。職業ジャンルはいろいろで、仕事の説明中心ではなくその人の生き方を中心にきく。若者がおもしろい大人と交流する機会をもつために行っている。スキルよりコミュニケーションをとることを目的としている。

#### 活動③：夢プロジェクト

若者の「やりたい」を実現するために、月一で何にチャレンジ

するか、みんなで相談して決める。若者が主体的に準備・運営することをユースワーカーがサポートする。やりたいことを書く掲示板も常時設置している。

質問 (Q&A) :

Q. 畑には何を植えている？

A. これなんだろうね、春菊とかじゃないの？とか、かぶとか。向こうにね、いま畑に何植えてあるとか畑の担当者が若者に見えるように作ってるから、あとでそれ見た方が間違いない。

Q. 育てやすいやつを育てている？それとも育てたいやつをそだてている？

A. 育てたいやつかな？今までは最初じゃがいもやって、とうもろこし、さつまいもは割ととれたかな？あととまと、夏野菜は結構やっていた。きゅうりとかなすとかな。

Q. 畑に何を植えるかは職員さんが考える？

A. まあわりとそうだね、この季節は何がいいとか考えながらって感じかな？

Q. 音楽スタジオは小学生は使えない？

A. 小学生はダメにしていますね。それはメインのターゲットは中高生からってことなので。学習室も中学生以上じゃないと使えない。その辺やっぱ中高生が自分たちの場所だって思ってもらえるように。

Q. 音楽スタジオは団体登録しないと使えない？

A. 団体登録っていても一人で管楽器の練習しに来たりするのはOK。あと若者面白いやつはカラオケしにくるやつもいる。YouTubeとか、オタ芸やっている子もいる。

Q. 音楽スタジオは1コマ何分？

A. 1時間20分、だからバンドやっっている子だとセッティングもあるから1時間20分だと短い。ドラムの練習だけの子は1コマが多い。

Q. 音楽スタジオはいつから予約できる？

A. 2ヶ月前から。でも大体埋まってないよ。だいたい前日の夜中とか。帰るときチェックしても予約入っていない。

Q. 音楽スタジオはいつでも予約できるって感じ？

A. コマが始まる前ならネットで予約できる。時間すぎちゃうと予約できないから受付で入れてあげる。楽器もギターとかベースとか貸してあげる。

Q. 利用登録している人とビジターの違いってあるんですか？

A. 特にない。でも、スタジオとかも世田谷在住の若者が半分以上じゃないと登録できない。例えば、杉並もユースみなみっていう若者支援施設があるんだけど、そこが混んでるからってこっちに登録したいとか杉並の人たちがいっぱい来ても、世田谷在住の子が半分以上いないと登録できない。

Q. 基本的にいつも登録者とビジターの差はあまりない？

A. 基本的には活動で差が出てくるのはスタジオぐらいかな。高校の友達と一緒に来るってケースは、結構あって世田谷から例えば近くの日黒区の学校に行ってて、日黒区から友達連れてここに来たら、半分以上がビジターってことが結構大いにあること。だから高校生はひとり来ると、10人増えるみたいな感じ。口コミでその子が次連れてみたいな感じが圧倒的に多いかもしれない。

Q. 多目的ホールではどんなイベントが行われるのか？

A. ライブもやったりとか、フェスをやったりとかしてる。高校生の演劇の大会もここでやったりとかもしてるし、地域の大学生は地域貢献したいっていう話があって、結果としてミュージカル学科の子が中心にいたので、ミュージカル学科の子たちがステージでコンサートをやって、地域の人に来てもらって子ども食堂の宣伝をするみたいな活動をしたりと



か。今度フェスを予定していて、3月年度末に今出演バンド募集中ってかんじかな。去年はダンスチームが6チームぐらいとバンドが10くらい、13:00から19:30くらいまでかかるフェスをやってたけど、今年はダンスとライブ（バンド）は分けようということで2日間。割となるべく運営も若者にやってもらうようにしてる。

Q. 多目的ホールの機材の使い方は教えてる？

A. 基本的な使い方は教えている。本当にバンドをやっている子たちに例えば5人のバンドにひとりずつ音を返してほしいというところの機材だと全然足りないけど、ざっくりと返しがあればいいぐらいの感じであれば、自分たちでセッティングしてって感じで。高校生が今年夏ライブをやって、それは一つのバンドでライブってなかなか貸せないの、3つ4つ集めたらいいよーっていう話をして、そしたらその子たちが5つのバンドを集めたので1時間半くらい自分たちでステージつくってスタジオから機材運んで、音響照明自分たちでやってライブをやった。だからまあ、難しすぎないっていうのは割といいかなって感じ。だけど本格的にやると結構大変。やっぱ音響タクトか照明機材レンタルしてって感じだったり。そういうオペレーションの人入れたりって感じ。今のかんじだと、若者だとその自分たちでやる音響照明で十分って言うてるから。だから音響照明に興味がある大学生や若者がいるとまあその子たちに少しやってもらいながらっていいかんじですね。

Q. 調理室で作ったご飯は多目的スペースでたべていいのか？

A. 食べていい。一応、食事のときはテーブルクロスをしようっていう話にはルール上なっている。

Q. 毎週木曜日に開催される楽しい食卓プロジェクトのご飯は無料で食べられるのか？

A. 1人200円出してる。たまに高校生200円でも高いっていう。高いっていうかお金持ってないっていう子がいるので月に1回100円DAYを設けてがつつり食えるようなその代わりに、100円で作れるものしかつくらないけど、この間はお好み焼きを。

Q. 楽しい食卓プロジェクトで作るご飯の内容は高校生が自分で決めるのか？

A. 多目的スペースで食べ終わった後に翌々週のメニューを三つ選ぶ。その三つを入り口でアンケートをして一番多かった食事を作ってる。ここにいつも来る女の子たちがいて、その子たちは男の子からえって思われるようなものをつくりたがるの。たとえばきっしゅとか。男の子はがっつり食いたいのが多いので。たとえば、チャーハンを作ろうっていう日でみんなアイデア出し合って7種類作った。男の子いっぱい来て。4時過ぎから買い物行くから、どっかチームとして貢献するというか食べる場所からしか来れない子がいてその子たちは食器洗いするって感じかな。包丁の使い方から缶詰の開け方、缶切り使ったことないもんね。そういう若者がいてびっくりすることがよくある。単なる食事提供はしたくないとおもってるのは自立していく上で、自分でご飯作れるってみんなもいえをでるときには自分でご飯作れる作れないって結構大きな要素になってくると思うので。そういう意味もあって一緒につくろうみたいな。その代わりに、すごい簡単調理でめんつゆは万能のように使ってる。

Q. 楽しい食卓プロジェクトには自立とかが大きな目的としてあるのか？

A. それはもう割とはっきりしてるのかな。生きるためのスキルをやっぱり身につけてほしいっていうのはすごくやっぱりあるので。

Q. 月に1回行われる若者の運営委員会は中高生がメイン？小学生は入ってはないのか？

A. 小学生は入れてない。高校生、大学生がメイン。中学生はオブザーバーとして意見は出来て、意見は言っても構わない状態でやってるけど、実際やってるのが19時21時とかでやってるので、ここ中学生は20時まで、小学生は18時までって決めてやってるので。

Q. なかなか小学生が運営委員会に参加出来ないっていう状況になっているのか？

A. そうね。小学生が参加しないのはこのメインターゲットではないというところで、小学生の意見は代わりに高校生がアンケートして聞くみたいなことはしてます。

Q. 場所を提供するにあたって空間デザインなどに若者の声ははいっているのか？

A. これは入っています。1番最初はね、若者と設計の、要するに建築家と一緒にワークショップをして、こういう場所にこういうものを配置しようっていうワークショップをやったり、それで建物の基本設計ができて、パーツが出来上がることでどんな家具を入れるのかも全部若者と決めて、ほとんど若者が最初やったワークショップのまんまだいたいここが出来てるって感じかな。

Q. 交流スペース、多目的スペース自由に使える場所では具体的にどのようなことをしているか？

A. 割とそういうスペースは話したり、ゲームしたり、グダグダしたりっていう感じですかね。ちょっと音楽やったりしたりとか。

Q. イベントなどに使う経費はどこからでているのか？

A. これは基本的には世田谷区の税金から出ています。運営に関する部分で言うと委託費をうちの教官がもらって、そこから出してるところもあれば、光熱費なんかは世田谷区がもっていたりっていう、感じですね。

Q. 若者がイベントを考えたり運営に関わることが出来るのか？

A. なるべく若者が関わるように努力はしています。出来るところは出来るだけ任せるようにしています。明日アクションのお出かけ企画があって、動物園に行くみたい。あと、明日ここで模試をやります。アップス模試っていうやつです。それもアクションっていう会議で学習室をよく利用する若者が、過去の問題を自分でやるとなんとなく時間もルーズになっちゃうし、採点も自己採点になって甘くなるっていうので、過去問演習会をやりたいって言い出したの。で、1回やったの。あんまり人が集まらなかったけど本人はすごく出来たことに満足して継続出来たらいいなあみたいなこともあって、じゃあうちがもうちょっと主体的に関わるような形でやってあげるよっていうことでセンター試験の過去問を何分かって時間を決めて一斉によーいドンってみんなやって、採点は交換して採点するってことをやって、今2回やってきてるんだけど、もっと

やって欲しいっていうので明日は初めて2科目続けてやるみたいなの。なのであんまりこうしなきゃいけない、ああしなきゃいけないみたいなのは思っていないので、若者のやりたいことはどんどんどんどん発展させながらやるっていう感じかな。

Q. 1ヶ月の利用者はどれくらいなのか？

A. 6000人ちょっと。平均220くらいかな。年齢層で多いのは高校生。高校生の中にはここを家って呼んでる人が結構います。家にほんとに帰なくて。学校に行けよとか、そういう話もしょっちゅうしてます。高校生だと、中学同級生だったのがばらばらになるじゃない。だからここにくれば誰かいるみたいな感覚で1人で来る子が結構いて、その中でまた友達の友達がまた友達になってみたいみたいな形で広がっていくのかな。であとうちのユースワーカーもいっぱいの人に来てるけど、きちっと一人ひとりに対応出来るようになるべく単なる受付人だけじゃなくて、若者が遊んでる中に入ってって色々な話を、声掛けたりするので、これ職員に言ってるんだけどマイルドなお節介って言ってるんだけど、例えば1人でゲームやってたり漫画読んでたりするときに、どう？その漫画面白いの？ってちょっと声をかけたりしてほんとに嫌そうだったら逃げなさいって。あ、悪かったって。そんな形で声をかけなさいって言ってるので、ひとりの子達にはそんな対応をしています。であと意外とさっきゲームやってたりとか漫画読んでたりしてても話しかけると結構食いついて来る子がいます。

Q. 施設の利用者さんの利用するきっかけは？

A. 高校とか、中学高校はもともと地域の運営委員に校長先生が入っているのでそういうところにチラシを定期的にまいたりだとか、児童館を通じて広報活動しています。でも圧倒的に多いのは高校生のクチコミだと思います。希望ヶ丘青少年交流センターどれくらい知ってるかまだ調査をしたことがないので分からないけど、たぶんこの名前よりもアップスっていう名前の方が広がっちゃっている感じはします。下に来て最初にアップスって愛称だったからできた頃は愛称の表示がなかったの。で1階の受付でアップスってどこにあるんですかみたいなことが結構あったと聞いています。大学生になって初めて世田谷に関わりを持った人たち



が知っているかっていうと、まあなかなか知らないと思います。その辺、特に大学に対してアプローチをしていきたいと考えています。

Q. 若者のコミュニティを作るためにスタッフが心がけていることは？

A. 色んなことを、誰かがやりたいって言ったことを出来るだけ色んな若者に発信しながら、例えば最初のころお泊まりをするでしょ。お泊まりが出来るんだっていうことがウワサになると、それが広がってじゃあ私達もやりたいとか、次に何かやりたいってことが広がってそれがね、なんかだんだんだんだんやりたいって言った子達を中心にコミュニティを作っていくという形なので、どちらかと言うとコミュニティを作ろうという意識はしていなくて、やりたいっていうことをどうやって多くの人に広げたりとか、やりたいことをできちゃうと結果としてそこを達成した子達で仲間になってるみたいなのところがあります。

Q. アクションっていう会議なんですけど、それは自分がやりたいなって思ったことがある人は、自由に参加しようっていう感じなのか？

A. そう。まあ、例えば紙はった人は来てればやりたいことをそのまま発表するって感じだけど、その子がいなかったりするときはこんな意見もでてるよみたいなことは話したり、なんかこうある種ブレインストーミングだと思っているので、みんなでブレインストーミングしながら、だからアクションの会議で決まったことでできてないのも結構あって、お出かけも随分前の企画なのかな、でお泊りもまたやりたいって言うし、職員と対決したいっていうのもあって料理対決とかやりたい。

Q. PRシートみたいなのがあって、書きたい時に書いてるって感じなのか？

A. そうそうそう。書きたい時に。今動いているのがお出かけが明日行くことになったのと、あと中学生が漫画を買って欲しいって言ったので、じゃああの買うからアンケートしてくれたらそれを買うところまでアクションとしてやってていう話をして、今中学生が一生懸命アンケートをまとめて購入するところまでやってくれるのかな。

Q. 中高生の欲しい漫画を買うってなったら世田谷からお金はすぐおりのものなのか？

A. お金、例えば、20冊30冊だったら予算からはすぐ出るね。

Q. アクションっていうのはどれくらいの期間でやっているのか？

A. いやいや、もうそれはいくらでも差が出てきちゃうんじゃないかなって思うけど、本当に毎月やる必要があるのかっていうのは私として悩んでいるところで、でもね、なんか1個ずつ解決してくってよりも、いくつかアイデアが出てくる中で、電線してって熱が高い時に一気にそこをやるって方が向いてるのかなみたいな。あとね、若者に言われるのはね、例えばお出かけするっていうのも全部自分たちで決めていいよっていうと困るって言われて、日にちだけでも決めてくれって。この日にやる？って言ったら考えるって言われて、じゃあ今回試しに12月15にやろうって。だから明日のツアーもどうなるかまだ決まっていないみたいなのところもある。動物園行ってね、何するんだろうね。4人行くんだって、で職員があと1人行くんだけど、まあその4人で。職員にはなんかアップスの仲間と動物園に来た体験ができた方がいいよねみたいな話はしているので、まあいくつかアイデアを持っていくのか、若者がアイデアを考えてくるのか分からないけど。どんなんなるのか、逆に言うと当日の職員の力量が問われるんじゃないかなみたいな、っていう感じかな。

Q. 中高生がやりたい企画の担当の職員っていうのはどうやって決まるのか？

A. 担当の職員、まあなんだろう、年齢とか得意不得意もあるのでその辺は多少考慮するけれども、でもうちに割と若い職員が多くてなので、なんていうのかな、あんまり仕事が被らないように、その仕事の全体の量のバランスとか見ながらやってくって感じかな。

Q. 割り振ってるって感じなのか？

A. そうそうそう。その割り振りは俺がしてる。

もちろんあの人とやりたいって言ったらそっちを優先すると思うけど。あんまりね、若者からユースワーカーを指名するってことはあんまりないね。いやほんとはあるのに言えないだけかもしれないけど。

Q. この施設のユースワーカーさんはどれくらいいるのか？

A. ユースワーカーは今常勤で来てもらっているのは9人。あと非常勤が5人いて、それから大学生時代のインターンは、一応ね、職員でもない学生、要するにみんなみたいな人に有償のインターンとして働いてもらっていて、1日1人から2人大学生とか、まあ社会人の人もいるけど。あと地域の人に福祉関係の人がいたりしている。長いでしょ？9時から、。だから8時半から10時半までっていう形で職員のシフトを組んでいるので、1日12くらいかな？で、なるべく、夜活発にあの人たちが動くのでそれに合わせて夜6時8時くらいが1番人が多くなるので、そのところが被るようになるべくしながらって感じ。

Q. カフェを手伝ってくれる地域の方はボランティアなのか？

A. カフェを手伝ってくれる地域の方はね、仕事で入ってる時はもちろん有償。でそのかわりね、イベントの時はボランティアやってないってことをある種条件としてお願いをしてるので、割と地元でPTAの活動やってるおばあさんとかが多いと思う。そうすると結構アップスのちまたのうわさも教えてくれたり、小学校の予定こんなですよとか、中学の予定こんなだっっていうのも教えて頂けるメリットがあるのかな。

Q. 実際のここのアップスは若者は39歳までっていうように決めてて、実際その20代以降の方って若者っていうのはどれくらい使っているのか？

A. もうね1、2%だと思う。結構ね難しいのは、39までっていう年齢はまあその、就労とかっていうところでっていう年齢ではあって、決まってる、39になるとね乳幼児のお母さんたちがみんな入っちゃうんだよね。対象に。で、そういうお母さんは自分を登録される方もいらっしやるので1階に保育園の一部にお出かけ広場って、在宅で子育てしてる人が集う場所があるんだけど、そこ来ないでこっちくる人もいるので、そういう人もちょっとだけいるって感じかな。あと、20代でなかなか仕事つけないっていうのは結構いる。もうね、バイトを転々としちゃうとかね。

Q. そういう上記の方々、出会いを求めている？繋がりを求めてくるのか？ただ自分がいられる場所を求めてくる？

A. まあ、そうね。やっぱ話を聞いて欲しいっていうのがあるんじゃないかなとは思うけど。

Q. ユースワーカーさんのインターンでえらぶ基準は？研修どういったのをやるの？

A. 研修でいうとユースワークで有名なのは京都、神戸、横浜とか、札幌。児童館ではなく、ユースセンターがあるので、その人たちが今ユースワークの全国協議会をつくろうという動きがあって、その人たちが作った京都のユースワークの研修は私も受けたことがあって、それにちかいいものをベースとしてうちの職員には受けさせている。

でも、若者の行動をどういう風に読み取って、次のアプローチをするかみたいなことが核になってきて、そのために自分のことを自己開示できたりとか自分を知るみたいな研修だったり、もちろんコミュニケーションをとるトレーニングをしたりだとか、そのグループの関係性をどう見るかみたいな研修はもちろんしている。でも、あとは最近すごく必要だなと思っているのは、自分のメンタルケアができるための研修はしている。やっぱ、ここで働いているとすごい元気な若者が実は昨日リストカットしたみたいな話は結構ある。そういうのに出会う場面は。

さっきも言ったように兎相とか警察もでなきゃいけない場合も結構ある。で、心ざわつくじゃん？それを、どうやって、その引きずらないで次の日に自分がフレッシュな感じで

若者に接することができるのか。その辺のセルフケアってすげえ大事だになって最近すごい思ってた。あと、京都のやってる少年院の研修はわりとそういう自己開示とかグループでどうやってみるか話し合い多いんだけど、あとは、ユースワークってなんなのみたいな。

それプラスうちは世田谷版でそういうの作ろうって話をしてるんだけど。その中には若者がどうやって地域に出てもらおうかってところは少し考えてる。要するに若者が将来地域を担うんじゃないかって今も中高生なら中高生で地域の一員だし、今できるころをっていうのがきちんと考えながら。やっていくことが必要だろうなというのもおもっていて。もち



ろん、思春期だからと難しい一面もあるけれど、でも若者が元気だと地域が街そのものが元気になるって思うので。そのへんの地域とのからみについての研修は必要だろうなって思っていて。そこにどういう風でようかな。

～ユースワークの話するとき、結構地域性って大事にしたほうがいいんじゃないかって。共通の対人援助としてのいろんな能力のほかに地域って例えば静岡だったら静岡の事情があるわけだから、そのへんをどういう風に考えるのかっていうのはあるのかもしれない。でもね、いっぺんにそんな研修とかできるわけではないので、基本要素をおさえながら教えていく感じかな。

Q. オンジョブトレーニングみたいな感じ？

A. ああ、オンジョブトレーニングもそう。要するに一日の振り返りをしながらその引き出しをふやしていくっていうトレーニングはすごい。だからある場面を、若者の行動を一個の視点で切り取っていろんなことを判断するってすごく本質を見逃してるっていうか、そういう風に思っていて、ここで行動があったことはその行動の前になにか行動を起こす前の例えば今日家で喧嘩してきただからムカムカして他の子とぶつかったみたいなことがあるわけだから、なるべくそこを見えるようにするトレーニングとかはすごくこう。

たとえば何かトラブルがおきたとしたらそのトラブルが起きちゃったということをその日ユースワーカーは振り返りで、ここが何だったのかっていう判断ができてくる。できてないのかとか、じゃあそれを未然に防ぐためにはどうなのかっていうのをなるべくストーリーとして話をすることによって、他のもう少し経験あるユースワーカーはこんな対応あるんじゃないっていう話をしながら、引き出しを増やしていく。

ほんとはちょっと若者が一言やりたいって時にポロっていった一言ってなるべく聞くようにしていて、その時にネガティブなことを言っていないとか、ついそれ無理でしょとかって、ほら若者のいうことの中には結構無理なこともあるからさ、でもそれはどうやったらできるかねってい

う風に提案型ではなしているかはなせてないんじゃないかっていうのは日々のお互いがお互いをチェックしながらって感じかな。だから、チームで高めていくってすごい大事。なかなか1人だけでは高まっていかないというのかな。

Q. ユースワークやってく上で、自分のその職員さんのなかでも当たり前になっているものがあると思ってて。でも新しく入ってくるインターンの子とかはゼロベースだったりとかそういうのをすこしずつ伝えられていくのはそうやって振り返りとかしながらお互いに話していくっていう感じ？

A. ああ、そう。スキルとして、伝えなきゃいけないこともいっぱいあって、たとえば記録の書き方一個でも、うち通常の記録はあまりしてないんだけど、まあ、普通の日誌みたいなものはあるけれど、ちょっと気になる若者がいるときは必ず動向をつけていて、その記録の付け方も一回自分で若者とのやり取りを書いてみると分かるけど、意外と事実と若者がいってるけど事実かどうかわかんないことと、自分の気持ちと行動みたいのをきっちと整理をした方がこの子に対してこういうアプローチをしていこうみたいなものは見通しがたてやすいので例えば記録の書き方一個も一つの技術だとおもっていてそういうのは研修とかしながら、よそのよみながらきろくしていくみたいな。

それを日々できているかっていうのはチェックをしながらっていう感じかな。どういう人を採用するかっていうとね。多分一番採用悩むのはメンタル強い方がいいね。熱意があって、メンタル強そうな人っていったらいいのかな。こういう仕事を希望してくるこのなかには自分がつらい経験をしている子がいっぱいいて、そういう子たちもちゃんと乗り越えられればいいユースワーカーになるって感じだけど。けど、乗り越えるまではけっこう大変かな。なかなか人を選ぶっていうのはこいつ選んで正解だなんていうのはあんまりなくて、まあ極端な話普通に話ができれば誰でもいいというわけじゃないけれど、やっぱりそっからなんだろう。

なので、うちの職員は資格も問わないで一応大卒の職員はとっているけど、まあ多様な若者に対応できるように幅広い、それこそ不登校経験者もいれば、今もうやめちゃったけど、元引きこもりもいたしね。引きこもりの当事者もいたりだとか。一生懸命えらんでた。でもやっぱり紹介すると結構やらなきゃいけないことは多いっていう。イメージとして若者と元気に活動するイメージとほんとにやっぱり、福祉的な部分が両方、常に表裏にありながらっていう感じかな。どれぐらいで一人前になるんでしょうね、うちの職員は。まあ三年ぐらいたよねちょっと一通りできるようになってほしいなという風には思って、育ててるけどね。

Q. 若者の主体性って大事にしてる、若者主体でイベントが開催されてるっていうのを聞いて、若者が主体になると若者が負担に、実行委員会とかやっているものの負担が大きくなると思うんですよ。そういうもののバランスってどうやってとっているんですか。スタッフのかかわり方とか。その子の負担が大きくなりすぎないようにどういうアプローチをしているのかなって思って。

A. そうね、若者も忙しいからね。多分一つの答えはなくて、そのグループをどういう風にとらえているかっていうことを常に見るってことが大事で、例えば1人にほんとに負担がかかってないかとかみんなのモチベーションはどうかとか当然モチベーションが下がれば、やっぱ支援の度合いを増さなきゃいけないし、すごくいい関係で、自分たちでやりたいっていうときはあえてはなれるみたいなその距離感が1対1の付き合いもそうだけど、グループをいかに観察できるかってところが。

そこがうまくいく秘訣なのかな。この子たちだったら。この負担は大丈夫みたいな判断はして任せることもある。もちろん、グループをみることで、個々を見ないということではなくて、個々も見ると、グループも見るとしていうところで。今はわりとフェスの実行委員会なんかはわりと自分たちで行動ができてるので逆に言えば負荷かけようかなとかことを考えたり、でももうちょっと仲間が欲しいなと思っているところもあって、じゃあ、今実行委員会が持ってる熱をどう広げてこうかみたいなことに少しユースワーカーは考えるみたいな。漫画のアンケート見て

でもそうなんだけど、他の子徒とも一緒みたいに付き合っていると熱がだんだんさめてちゃうみたいなのところもあってその加減はすごい大事。

Q. 熱が冷めてきちゃうときはどうすればいいんですか？

A. ほんとにあるとこまで臨界期に達したら越しちゃうのでその前に新たな提案をユースワーカーがするみたいなのところで負担をお減らすことも含めて、もう一回一緒にやるってことだよ。主体的にやるってことは決して任せるだけではなくて、要するにほっとくわけではなくて、必要な時には後ろからそーっと押してあげたり、でも押しすぎると、出来上がったときにああ、やったっていう達成感がなかったりするの、その加減って結構大事で。時には失敗してもいいと思ってるので。

このグループだったらまた立ち直れるなって時にはあえてほっといて失敗させるときもある。失敗ができるってことはだいじにしてるのね、ここは。失敗をしちゃいけないっていう空間で常に動いてる感じがするので、わかものが。こんなこと言ったら、あの人がどう思うかしらってすごく気にしてるなってところはわれわれとしてはすごく感じてるので、いやいやこの仲間だったら失敗もガハハってわらってもっかいやろうぜってそんなふうになったらいいなって。

この間お好み焼き作ったときも300円分の食材で作んなきゃいけないから、みんなで調べてきて、お豆腐を入れるといいとかキャベツのかわりにもやしをいれるといいそんなアイデアでやるんだけど、調理に慣れてればお豆腐とかもやしとか水分多いからあんま水入れなくていいのに同じだけ水入れるから、できたお好み焼きがゆるゆるだったりとか、でもそんなの失敗しながら、リベンジしようぜって今度やろうっていうところにつながればいいなって。

Q. ここにきて印象的だったのが、室内が清潔だなって、一年だけ利用者がたくさんいるってことはそれだけ汚れがあるのかなって思ったんですけど、そういうのって職員の方が掃除してるのかそれとも若者にそういうルールを作って、点検してみたいなの。



A. 清掃はこの施設全体を管理しているところが清掃してくれてるので、床が綺麗だったりというのは定期的に清掃が入ってるからってところかな。若者も調理室なんかはつかったら綺麗にして戻すってというのはルールになってるので、でもみんなが守るわけではないので、一緒にやろうよって言って引っ張ってやることももちろんあるし、若者がもしここが本当に居心地がいいんだったらここを自分たちの居場所として考えて一緒に考えていきたいとは思う。

Q. 運営費が世田谷区の税金から出るって伺ったんですがつきにどのくらいですか？

A. 職員の給料とか入れて、7000万弱。

Q. そのお金の使い道はアクションっていう活動、漫画を買ったりだとかにつかってもいいよって感じなんですか？

A. こういう施設は児童館も含め、ほとんど人件費。それ以外のものはパーセンテージでいうと10%ぐらいなもんじゃないの。もちろんその中で区と相談しながらって感じかな。7000万ってきいて多いと思うか少ないかって思うかは別として例えばこの年間の保険のお金例えばここでけがしてしまったり、このものを壊してしまったり保険だけで100万だからね。そう考えたときに7000万って多いか少ないか。まあ多くは人件費だね、ほんとに。それこそ変な話、イベントみたいな例えば、縁日はほとんどここでの経費ないの。

だって若者がお金出して若者が稼ぐわけでしょ。もらってごみ袋買うぐらい。まあある種お金かけないでもできることってたくさんあるわけでしょ。

あとは、できるすべはある気がするね。お金なかったら若者と一緒に近くの見せまわって協賛金とるみたいなこともしたいなって、クラウドファンディングするとかさ。いろんな事が出来て、やっぱりその人の部分にかんするとある程度きちっと保障されてないと若者が利用するのにブラック企業みたいになったら困るでしょ。きっと公務員がやると倍ぐらいかかる。よく言うと、指定管理だすと7がけっていうからだから1億

ぐらいかかるんじゃないの公務員にしたら公務員だったら運営できないと思うけど、時間の問題的に。

## 感想

### 大津萌の香

世田谷区希望丘青少年交流センターアップスを見学してみて、正直、こんな場所が自分の地域にも欲しかったって思いました。音楽スタジオ、ダンスホール、クッキングスペース、塾のように環境の整った学習室。どのスペースもお金がかからず自由に使えることに驚きました。また施設に置いてある机や椅子、自販機の商品などを若者の意見を聞いて、何を取り入れているか決めているということを知って、自分たちで使う施設を自分たちで作るって素敵だなって思いました。私は中学・高校生のとき、授業の後は部活をやって帰るっていうのが当たり前だと思っていました。もしこんな施設があるということを知っていたら、もし地元でこういう施設があったら絶対利用していたし、自分のやりたいことを思う存分にやっていたと思います。

自分の"やりたい"が叶えられるアップスはほんとに若者にとって夢のような場所だと思います。だからこのような場所が日本にもっと増えて欲しいなって思いました。

### 松本成海

世田谷区立希望丘青少年交流センターでのお話を聞いて、若者の声がちんと届き、若者の思いと一緒に考えてくれる、とてもあたたかい場だなと感じました。

設立までの期間も含め、どういう場であってほしいか、何があったら便利かなど、若者の声をひろっていると聞いてとてもいいなと思いました。ちゃんと若者の声を聞いてくれて、それをしっかり受け入れて考えてくれる環境がどこにでもあったら、それがやる気や自信に繋がって、もっと自分の力が発揮できると思うし主体的に行動できるようになるのかなと思いました。

また、印象に残ったことは「誰かがやりたいと言ったことはみんなに発信すること、それが小さいことでも全部大切にすること」です。YECの放プロでも当てはまる考え方だと思うし、大切なことだなと思いました。1人の思いを発信することでそれに共感したみんなが集まってきて、一緒に考えて達成したら仲間になっていくという考えがいいなと思いました。それが自然にできるようにすることで、みんなが楽しく居やすい場になっていくのかなと感じました。また、小さいことも全部やりたいことを大切にしないと若者たちは自分の思いを言わなくなってしまうという考えを聞いて、確かにそうだと思ったし、だからこそ大切なことだと感じました。

この場所を訪れて、このような場がもっとあればいいのになと思ったし、これからの放プロの活動で生かせる考え方を沢山学ぶことができました。またこのような機会があったら、次は実際に施設を利用している若者たちにもお話を聞いてみたいなと思いました。

土橋もも

世田谷区立希望丘青少年交流センターアップスを見学して、どのスペースも設備がとても整っており、驚きました。子どもたちの声をしっかりカタチにしてくれる環境だからこそ、子どもたち

は自然と主体的に行動できるのではないかと施設を見て思いました。子どもたちが「やりたいこと」を自由に書けるPRシートには、多くの「やりたいこと」が貼ってあり、とても素敵だなと感じました。また、アップスで仕事に就けていない若者の就労体験もしていると聞き、とても手厚い支援をしている施設だなと感じました。私は、特にお話を聞いた中で子ども（若者）との信頼関係を貯金するという言葉が一番印象に残っています。「おはよう。」と挨拶するだけでなく、「おはよう。今日元気？」と一言添えるだけで子どもたちとの心の距離が近くなる。これは、とても基本的なことですが、自分にとって大きな学びでした。アップスのような場が日本中にたくさん出来たら、多くの子どもたちが主体的に自分らしく生活できるのではないかと思います。

## 西尾圭織

センターの中には様々なスペースがあり、それぞれにいろいろな使い方やアイデアがあってとても素敵だと思いました。設立時に市民や若者の意見を聞きながら作ったこともあり、いろいろな人が利用しやすい、過ごしやすい環境が整っていました。実際にその場で子ども・若者が勉強していたり、喋っていたり、漫画を読んだりしているのを見て、しっかりと子ども・若者の居場所になっていると感じました。驚いたのは、1人で利用している子も多いことです。私は見学する前まで、ユースセンターは1人で利用している子が少ないというイメージが勝手にありました。1人でも複数人でも利用しやすい理由は周りの目を気にすることなく、自分自身を出せる場所であるからだと思いました。

アップスを見学してみて、子ども・若者たちの気持ちを理解し、応援と協力してくれる施設だと思いました。学校でも家でもない自分を支えてくれる場所があることはとても素敵なことだと感じ

ます。アップスのような施設が日本にたくさん出来たらいいな  
と思いました。

# 喫茶ランドリー

日時：2019年12月14日

場所：東京都墨田区千歳2-6-9 イマケンビル1階

先方：喫茶ランドリーの店員さん

当方：安達樹璃愛、八木健斗、西尾圭織、松本成海

HP：<https://kissalaundry.com/index2.html>

Facebook：@kissalaundry

概要：「喫茶ランドリー」は、東京は森下駅と両国駅の間、墨田区千歳の住宅街にオープンした、現代版の喫茶店。営業時間は午前10時～午後8時。

築55年の建物の1階、元は手袋の梱包作業場として使われていた空間をリノベーションした建物である。お店では、コーヒーやお茶、軽食はもちろん、ランドリー（洗濯機）や大きめのテーブル、アイロンやミシン、お裁縫箱や編み物道具なども用意されている。リビングとして、読書室として、家事室として、工房としてなど、様々な用途で利用されることを目的としている。そのときにしてみたいことのために、あるいは、何もしたくないということのために、気ままに利用されることを目的としている。

施設概要：4つの利用可能スペース（フロア席、大テーブル席、モグラ席、町の家事室）とキッチンがあり、それぞれ個別にレンタルすることが可能である。

外観：あたたかさを感じさせる照明や小さな看板が印象的。店前のお花もお客さんからのプレゼント。





町の家事室：洗濯機とちょっとしたワークショップなどができるスペース。お客さん同士の交流の場にもなる。経費の都合上、コインランドリーではなく、レジでお金を払ってから使う制度にな



っている。視察に伺った日は、ハンドメイドアクセサリーのワークショップが行われていた。



お店の見取り図：お店の全体像を見ることが出来る。



モグラ席：入り口の高さより少し窪んでいるスペース。隠れ家感がありお客さんもとてもリラックスしていた。





大テーブル席：大きなテーブルがひとつでおもちゃなどが置いてあった。





レジの近くの雑貨売り場：常連さんの手作りアクセサリやヘアゴム、コースターや昔ながらのレコードなども販売している。地域との繋がりを感じた。





お店のアルバム：喫茶ランドリー改装前からオープン後までの様子がわかるアルバム。





プロジェクター：映像を移すことが出来る。お誕生日会やDJイベントなどに使われることもあるという。





みんなで食べた料理：メニューはすべてオリジナルの手作り。とても美味しかった。カレーは少しスパイスが効いていた。



質問 (Q&A) :

Q.設立のきっかけは？

A.noteに書いてあると思うんですけど、、、この本を書いているのがここのオーナーなんですけど、田中と大西は。設立の背景も書いてあるのでもしよかったら読んでみてください。この本が出版されたのがちょうどこの喫茶ランドリーがオープンする直前ぐらいだったので、喫茶ランドリーが1月にオープンして、本は12月に出版されたので、ここのことは書かれていないんですけど、なんとなくはわかるかなと。あと、ネット上のnoteってわかります？コラムとか書くような。それにけっこう記事書いているので、「大西まさし」で検索してもらえると、喫茶ランドリーのこ

とは書いてあります。あと、ここをモデルにしたお店がいくつかあって、万度ロマンカフェというお店からヒントを得てここを作った。このへん別に何を作ってもよかったんだけど、カフェや喫茶店っぽいお店が全然ないから、カフェをオープンしたらいいんじゃないかと思って作った。けど、コーヒー屋さんだけだったら色んな人が行き交うっていう日常的に色んな人が入ってくるのは難しいだろうから、洗濯機をおいたらどうかなって。洗濯する人も入ってくるし、幅広い人に親しまれるかなって感じ。コミュニケーションツールとして洗濯機を置いた。

Q.手作りのアクセサリ等が置いてあるが、どういう人たちと連携している？

A.常連さん。最初はオーナーのいとこの奥さんが作っているものを置いたのが始まり。あとは常連さんがお茶を飲みに来てくれた時に、「すごいかわいいね」って話をしたら、「よかったら置かせて〜」って感じでどんどん増えていった。レコードは、レコードが好きなお兄ちゃんがいる、すごい仲良いので、「よかったらここに置いてよ」ってそんな感じで。お花にしても、いろいろなもの全部お客さんが「よかったら置いて〜」って言ってもってきてくれる。

Q.アルバムを見させていただいたのですが、DJイベントもできるのですか？

A.そうですね。友達が音楽関係の人が多くて、もともと彼らもずっと音楽やっていたので、それもあって今ここでDJイベントやったりとかありますね。基本自分たちが何かやるんじゃないくて、町の人やりたいことを叶えられる場所にしたいねって話をした。ほかのイベントもいろいろあって、モノづくり系もいっぱいあったしびっくりするものもあった。デジタルチューバーの子が

洗濯機に映っている洗濯機を持ってきて、その洗濯機の子とお話をして洗濯をする。花王がスポンサーになってそんなイベントやったりとか。あとは、ミシン使ってなんかやるとかもあるし、トークイベントとか。今日の夜も5時からあるんですけど、会社のトークイベント。あとは会社の設立記念パーティーとか、セミナーとかお勉強系もある。いろいろですね。お誕生日会とか。犬もOKなので、犬のお誕生日会とかやったりとか。

Q. どのような年代の方が多いですか？

A. 年代はバラバラかな。赤ちゃん連れてくるお客さんもいらっしゃるし、常連もおじいちゃんとかも。一応あっちが事務所なんですけど、事務所に居座っちゃったりとか。自分の家みたいに刺身持ってきたりしてますね。

Q. けっこうこの辺の方々とのつながりが強いんですか？

A. いや、もともとこのオーナーもここに住んでるわけじゃなくて、地域に溶け込んでたわけではない。ここができて、だんだん浸透して、みんないろんな人が使ってくれるようになって地域と仲良くやってる。もともとは全然コミュニケーションもない状態だった。

Q. ここの洗濯機は無料で使えるのですか？

A. レジでお金を払って使ってもらうようになってる。コイン式にしなかったのは、ほんとはコイン式にして、ここだけ違うコインランドリースペースに当初はしようかと思っていたんだけど、コイン式にすると機械がすごく高いので、そこまで設備投資できなかった。でも別にコインランドリーで儲けようと思っているわけじゃないから、喫茶店の一角に洗濯機があってレジでお金払って使ってもらってもいいのではないかと提案を受けてこうなった。



Q.スペースが分かれているが、なぜ分けたのか？

A.別に分けてたわけでもないし、レンタルスペースをやる予定もなかったけど、たまたまお客さんから要望があって、全体を貸し切るってなると

細々したことができないじゃないですか。例えば、ワークショップやりたいっていったらここだけでいいよってなると思うから分けて使ってもらっています。

Q.喫茶店は平面なイメージだが、ここは窪んだところや上がっているところもあるが何か意図はあるのか？

A.これはたまたまで、中壊したら穴が開いていた。埋めるのにもお金がかかるからそのまま使っている。わざわざ作ったわけじゃない。上に上がっているところは、洗濯機の排水溝がこっちにあるんだけど、勾配を付けないと水が流れないからあげなきゃいけなかった。わざわざそうしたわけじゃないけど、結果的にはよかった。

Q.たくさんの方が使いたいと思えるように意識していることはありますか？

A.基本ルールは作らず誰でも使っていいよって言っています。あとはこんなことイベントやってるよってSNSにあげたりしている。これはしないでねといったことはあまり言っていない。「これをしたい」と言われたら、「いいよいいよ」って全力で応援する形をとっている。

Q.イベント開催の申請は何日前までなどの締切がありますか？

A.基本的にはないですね。内輪でやりたかったら別に告知とかいらないと思うので、明日とかでもできる。基本、告知して来ても

らう場合には、1か月前とかに大体チラシ配ったりしたいと思うからそこらへんはお客さんに考えてもらってやっている。喫茶ランドリー側から発信するというよりは、お客さん自身が発信している。

Q.中学生や高校生の利用はありますか？

A.親御さんと一緒に来ることはあるけど、中高生どうしでの来店はあまりない。

## 感想

安達樹璃愛

喫茶ランドリーでは、落ち着いていて何時間でもいれるような雰囲気印象的でした。店内には、常連さんが作った手作りアクセサリーが販売されていたり、お客さんが持ってきてくれたお花が飾ってあったりと、地域の人達から愛されているなど感じました。

DJイベントやお誕生日会など、大小さまざまな規模のやりたいことを実現できる場になっていて、こんな場所が静岡にもあったらいいなと思いました。もし静岡にもそんな場所があるなら行ってみたいと思います。「やりたいことを全力で応援する」姿勢をもって活動していると聞いて、放プロに通じる部分があると思いました。

喫茶ランドリーを設立した方のコラムに興味深いことがたくさん書いてあったので、機会があればお会いして話を聞いてみたいなと思いました。



八木健斗

喫茶ランドリーではお客さんと喫茶ランドリーの方々と気軽に交流していてすごく暖かい雰囲気だと思いました。

DJのイベントやトークイベント、お誕生日会など街の人の願いを全力で叶えてくれる場所で素敵な場所だなと思いました。静岡にはこのような場所がないのでとても羨ましいと感じました。

街の人のやりたいことをこのように応援してくれて繋がりが強いからこそ街の人に愛されていると思いました。

お客さんの要望でワークショップを開いてる時があるという話を聞いて、色々な世代の人が喫茶ランドリーの利用するきっかけになるとと思いました。

喫茶ランドリーで聞いたお話では人の願いを全力でサポートするといった放プロに繋がるお話も聞いたので本当によかったと思います。

# ビーラボ (b - lab)



日時：2019年12月14日

場所：東京都文京区湯島4 - 7 - 10

先方：山本晃史さん(b-lab運営スタッフ・YECOB)

当方：視察メンバー一同

電話：03-5800-2731

HP：<http://b-lab.tokyo/>

Instagram：[https://www.instagram.com/blab\\_tokyo/](https://www.instagram.com/blab_tokyo/)

Twitter：[https://twitter.com/blab\\_tokyo](https://twitter.com/blab_tokyo)

概要：「b-lab (ビーラボ)」とは、2015年4月にオープンした。教育センター（複合施設）の中にある区内初の中高生向け施設で、いつでも、なんでも挑戦できる中高生の秘密基地のような役割を目指す。

また文京区のほうでは設立にあたって下記の3つの目標を定めている。

1)「何かやってみようかな」を応援する

中高生の自主的な活動を応援するとともに、新たなことに挑戦する前向きな想いを受け止めることで、中高生が自らの可能性を広げる

2)様々な人との関わりから社会性を育む

中高生が、地域の人をはじめとする様々な人との関わりにより、新たな人間関係を構築していく中で、自らの見識を広げ社会性を身につける

3)地域の中の自分を自覚する

中高生が、地域の人との交流を通じて、地域の中における自らの存在を自覚し、社会参加のきっかけをつかむ場とする

b-labの利用対象者は文京区在住・在学・在勤している中高生世代。また一部の部屋は区内に在住・在学・在勤する一般の人でも利用できる。

文京区から委託を受けて、b-labを運営するNPOカタリバは、ミッションに「『どんな環境に生まれ育っても未来を作り出せる』と信じられる社会へ」をかかげている。そのための手段として 意欲と創造性をすべての十代に届けようと全国8か所で、b-labのようなユニバーサルサービスのユースセンターを運営している。

施設概要：

1階

多目的スペース：料理や工作ができる

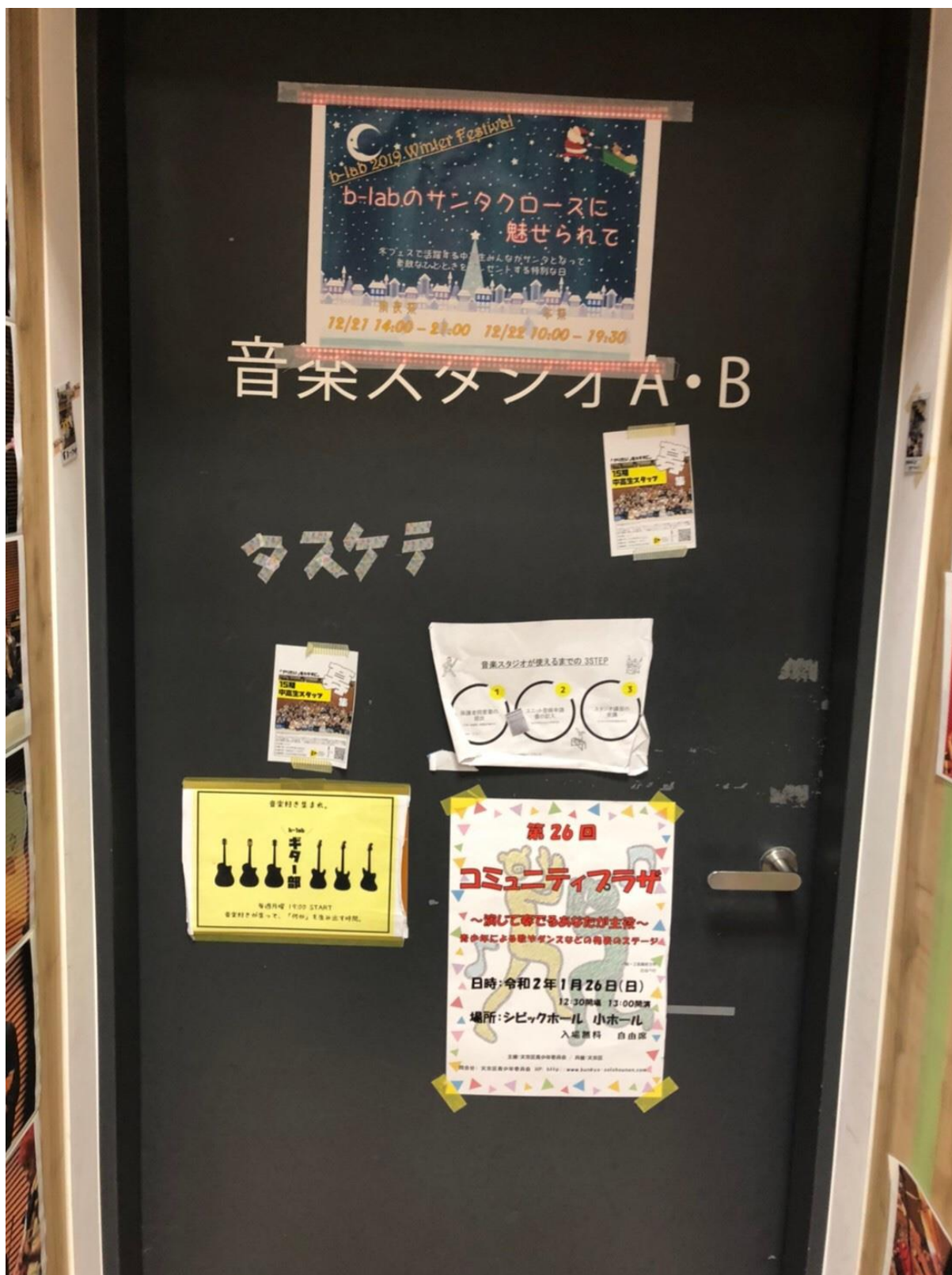


中高生談話スペース：無料WiFiが通っている





音楽スペース：大小2つの部屋がある、楽器を無料で貸し出している





ホール：ダンスの練習や発表会ができる場所





2階

研修室：静かに集中して勉強できる



プレイヤード：屋外でバスケなどで遊ぶことが出来る



3階

軽運動室：卓球などの運動ができる。扉を開いたところにある鏡もダンスの練習などに利用することができる



## 設立の背景

NPOカタリバ：予測不能な社会をこれからの子供たちが生きていくには、その子の力や意欲と創造性を伸ばさなければならない。しかし刻々と変化する時代において、日本の若者は自己肯定感が低さから、自分に自信が持てない、主体的に行動が起こせないという心情的問題がある。しかしこれは、個人の問題というよりも、そのような事態が発生する社会背景に問題があると認識し、そこにアプローチしたいという思いがあった。さらに、現在の日本社会は、生まれた環境によって出会う人の数、体験できることの量などが変わってしまう「きっかけ格差」が広がる分断社会となってしまう。そして親に自分のことが話せない若者の増加や、学校の先生の多忙化が社会問題としてあることなどある。

このことから家庭と学校だけでは、これからの時代を生きていく中高生を支えることはできないと考え、NPOカタリバは設立された。

b-lab:都心の中高生は、受験など様々な理由で地域との接点が薄くなる傾向が強く、地域と生徒が断絶されてしまう。そんな状況に強い危機感を抱いていた東京都文京区が「被災地以外でも子供の日常を継続的にサポートできる居場所を作りたい」と考えていたNPOカタリバと出会い、中高生の居場所b-labが設立された。開館にあたっては、3000人以上の中高生にアンケートをとったり、ヒアリングやワークショップなどを開催して中高生にアイデアを募り、「b-lab」という名称や今のロゴがうまれた。空間デザインにおいては、例えば、中高生の要望に応じて、動かしやすい机のデザインにしたり、一人でもゆったり楽しめるような「スターバックス」の空間に近づけるため、「奥のカウンター」と呼ばれるスペースを設置した。ほかにも畳が欲しいという声には、畳椅子を設置するという形で答えたり、憧れの先輩が演奏する姿をこっそり見たいという要望から、音楽スタジオを覗ける窓を設置した。このようにして開館前から中高生の声を施設に大きく反映させた。

#### 活動①：All-b-lab作戦カイギ

「こんなことが出来たらいいのに」「こんなふうだったらもっと使いやすいのに」などのb-labに対する思いを話し合う場。2ヶ月に1回程度の定期開催している。その場にいる中高生を全員強制的に集めて決まったトピックについて中高生にざっくばらんに意見出しをしてもらう。

→中高生のための施設だから中高生のニーズに答える、中高生の声を拾う、中高生みんなにとって当たり前活動になってきてい

る、みんな意見を言ってくれる雰囲気が出来ている

### 活動②：中高生スタッフ

b-labを通して自分のやってみたいことを叶える。YECでいう放プロのようなもの。職員の方がヘルプについてくれる。40名程度の中高生スタッフがいる。活動期間は4ヶ月程度。

(活動例)フリーペーパーを作る、パラスポーツイベントを行う、ゲームを作る、b-labの新しいCMを作る

### 活動③:フェス

年3回(春・夏・冬)に行う。ライブのステージ運営など中高生たちが自分たちで企画を作る。春には卒業する高校3年生を送り出すためのイベントが行われる。b-labは基本的に文京区に住む中高生が利用対象で施設を利用できるのは文京区に住んでいる、文京区の学校に通っている中高生のみだが、フェスには区外の人も来ることができると区から許可が出ている。

2日間にわたって開催され、2日間の中高生利用合計人数は210名程。1日に50名程の大人が施設を訪問する。

(活動例)ライブ、バー、スポーツアスレチック

### 質問 (Q&A) :

※あっくんさん→b-labの職員さん

※まっきーさん→b-labを利用している高校生

Q.使えるのが文京区に住んでるか、文京区の学校に通っているか、あるいは働いているかとのことですが、基本は区外だと使えないってことですか？文京区の学校に通っていて、そこを卒業したら？

A.あっくんさん)区外に住んでて区外の学校だと使えない。

Q.文京区の学校に通っていたけど、卒業したら使えなくなるってことで



すか？

A.あっくんさん)そもそもの年齢が中高生世代だから、高校を出た段階で利用対象外になる。

Q.そういうものは卒業式みたいなものはありますか？

A.あっくんさん)b-labの中で年三回「フェス」っていうイベントをやって、中高生が自分たちで企画を作ったりとか、ライブのステージを自分たちで運営してライブをしたりとかなんかやるんだけど、それを夏と冬と春にやって、春はまさにそんな卒業な感じになってて、卒業する三年生を送り出すみたいなイメージはやってるね。で、それを最後にやって、帰ったら翌日からは彼らは卒業生で、新大学生になる世代なので来館できなくなる。

Q.中高生だけにこだわる理由って何ですか？

A.あっくんさん)施設としてはそもそも文京区が中高生のための施設とって作っているのが一個の回答になる。このユースセンターとかの文脈で行くと、いわゆる、こういうのができてきているのは、小学生って世代になると、割と児童館だったりとかなんか学堂だったりとか、割と触れるものが多かったりするんだけど、そのあと中高生ってなると実は彼らが放課後に過ごす場所だったりとか、サポートって急にガクッと減って、大学生になると今度はより自由が与えられるので、なんか主体的に自分も、みんながやってるみたいに、これやってみたとかあれやってみたいとか、自分で時間やりくりしながらできるようになるというところで、そう考えると学校が終わった後の彼らを支える時間っていうのは、結構中高生世代ががっぽり空いていて、それで彼らがどこいくか、塾行くとか、どっか行くってなったら、お金払ってマック行ったりとかそういう放課後になってしまっているんで、中高生を支える場所が必要だよなって考えている自治体とかは、こういうセンターを作るって方向にかじを切ったりする。ってところなので、二つ目の回答としては、小

学生とか大学生に比べて、彼らが放課後に過ごすとか体験できるものが少ないから、そこへのサービスとしてこういうセンターがあったりするって答えになるのかな。

で、ちょっと小学生にアプローチしようかなって考えていることもあって、それは何かというと、b-labの認知度って中高生の中では実は区内では5割しかなくて、地図みると文京区の端っこに合るとかそういう理由もあるんだけど、ほかが50%の認知度になっているので、その認知度を上げていかないといけないってなったときには、中高生に学校に授業に行ったりとかそういうのはできてるけど、小学生の時からb-labってこういう場所があるよとかそういう案内がとか、職員との関係性がもしできてたら、中学生になった段階で利用者に代わるので、小学生にも未来の利用者になっていくみたいな感じで、アプローチをとろうかなみたいなことは今文京区とはなしてる。そんなタイミングです。

Q.文京区の上の人に確認しないと、そういうこともできない？

A.あっくんさん)そう、結構がんじがらめ。結構大変だよ、こういう下につく運営は。契約法事項も結構違ってて、割と今の文京区のb-labの運営は、文京区と結構話して文京区の許可が下りないといろいろできないっていう契約になっているので、そういう方針になっているので、なんかそのこの施設の一個難しいところは、文京区にとってはあの三つの目標を、b-labという箱の中で完結してほしいと考えてる。でもほらステージって言ったら、放プロもそうだけど、地域の人に出会うことによってさらに加速したりとか、地域に飛び出すからこそ出会える新しい友達とか出てくるとは思うんだけど、そういうことが職員と一緒に彼らがちょっと外に出てみたいってなったときに、b-lab職員と一緒に外に出ることができない、外に出てたらb-labの管轄外だからと区としては思っているんで、それができないので彼らがやりたいことに実は制限がかかっているという現状があって、そこを地域連携とかいう絡みにして、職員と中高生が地域のためにと行って、ちょっとずつ外に出るという既成

事実を作ろうとしていて、でも現状としては、ちょっと職員と一緒にコンビニ行こうとかはだめって感じ。そういう意外と大変なところもあったりする。

Q.b-labの職員の方と、文京区の職員の方の考えのずれって結構あるんですか？

A.あっくんさん)あるね、今年で係長が変わったんだけども向こうの、去年まではほんとにthe公務員みたいな感じで、凡例、去年に実施例がなければだめですみたいな感じで基本無理だったけど、今年の方は割と合理主義で、今の世の中だったらOKなんじゃない、割と寛容にしてくれてて、今は組織としては背中が押してもらえている感じだけど、例えば外に出てくとかは、広い紀要？って契約で結ばれている部分なので、その部分は年度更新とか三年ごとの更新で変えていく必要があるんで、ちょっとまだ、じゃあ来年どういう文言にして、なんだろう、どうやって条件を突破していこうかって相談してるって感じ。

Q.さっき、中高生がスタッフやっているみたいのことをいっていらっしやっただけじゃないですか、そういう中高生ってどういう風を集めてるんですか？

A.あっくんさん)今は結構継続する子が多い、中高生スタッフって、なんか一学期二学期三学期みたいな感じで、何期みたいな感じで一応その子があんまり長すぎるとエネルギー切れする可能性があるから、数か月で一回サイクルみたいな感じでとっているんで、一回入ると来期も割と中高生スタッフになってもうちょっと自分のプロジェクト頑張ってみたいっていう子が多いのと、そこの中高生スタッフと仲良くなった子が、自分も中高生スタッフになってみたりとか、わりとその辺を中高生スタッフをロールモデルに思ったりとか、その子に巻き込まれる見たいので中高生スタッフになっていく子が今ほとんどそんな感じ、b-labの来館も実はそれが結構多くて、友達が新しいやつ連れてきました見たいな感じ



で、口コミでバーツが増えてる感じになっていった。五年やってると  
そうだね、割とそういう系は口コミとか、中高生が中高生を呼んでくる  
みたいな感じになってるかな。

Q.中高生スタッフでやりたい、放プロみたいな感じって言っていましたが、実現したいことが地域でやりたいことだったらどうなるんですか？

A.あっくんさん)これは非常に大変なんです。例えば今あるのが学校  
で、ちょっとDJが好きな子がいて、で学校でDJイベントがやりたいっ  
て子がいるんだけど、その子はそのb-labの中でも主体的に頑張っ  
て、この中でもDJイベントを実現してたから、じゃあいよいよ学校でや  
ろうって風に今なってたんだけど、そこに向けてじゃあ、b-labの中  
ではMTをしてこういうアクションしようねって言って、やってみるっ  
て行って彼は行くんだけど、そう一人になった瞬間に、外での成功体験が  
ないから、そうひとりぼっちになるから、どうしてもちょっとできな  
かったみたいなので翌週帰ってくるみたいなことで、急に速度ができな  
くなっているのが現状としてあるので、どうしたもんかねみたいのがいま  
さに悩み中だね。今はそうだね、でも過去の例のほうはそういう橋渡し  
しちゃえば自力で突破しちゃう子は、自分でプロジェクトをそのまま、  
企業連携とかやっちゃう子とかはいた。その子に、外の活動ってなった  
ときにその子に任せられてるみたいなそういう感じになってる。そうい  
う難しさはあります。

Q.まっきーさんはb-labに5年間来てると思うんですけど、たぶん自分  
にとって魅力があるからそうやって毎日っていうか頻繁に来ていると思  
うんですけどb-labのどこが1番好きですか？

A.まっきーさん)なんだろう。僕にとってか。僕は多分ほんとに1番おっ  
きいのは音楽スタジオがタダで使えるところですね。言ってしまうと僕  
は中学校の時部活が今と全然違ってソフトテニス部だったんで、テニス  
がb-labでできるってわけでもないし、WiFiとMacBook使ってYouTube見  
るみたいなことをしてたり、友達と友達の持ってるゲームをやる場所と

して友達の家じゃなくここに集まって友達の家ของเกมを持ってこさせて、みんなでスマブラをやるみたいな、そういうのがあって中学のときとか来てたんですけど、高校に入ってから僕は軽音楽部に入って高いから、中高生のお金の重たさからすると結構外部のブログスタジオって高くて、3時間で1000円とか、1人あたり取られたりするんでそれがほんとにタダってなったら使うしかないやんつって施設ガイドのそこには400円って書いてあるんですけどこれ一般利用のやつなので中高生は全部タダで使えるんです。ここの施設は雑談スペースとか以外は一般利用もできるんです。ホールと音楽スタジオに関しては一般利用も可能なんですけどでもやっぱり中高生タダしかもギターもベースもドラムもタダで借りられる。これは使うしかない。

Q. ちょっと先程の似てるかもしれないんですけどまっきーさん自身がb-labに入ってっていうか来るようになって今までで1番変化したなって思うことはなんですか？

A. まっきーさん) 変化かあ。うーん。変化ですか。難しいなあ。なんだろう。あんまりこれ話すのはいい話ではないんですけど、ちょっと頭に念頭においておいて欲しいのがここに来る人決して学校が全力で楽しいとか家に満足してるってやつらではないんですよ。正直な話。なんだかんだで学校に居場所がなかったりとか、家とかでもあんまりって人がいて、そういう人たちの集まりがきて、友達になっていく。自分とおんなじ境遇のコミュニケーションがとれるので居やすいつてのがほんとに第1の要因としてここに来る人が多くてそういうのも結構念頭においていたでとわりかし接し方がすぐにわかると思うんですよ。ここに来る場合だとか、そういう時に。なんですけど、でも僕は中学のときに生徒会やってましたし、高校でもそれなりに色々人を引っ張るような立場にいたので自己発信力みたいなものは正直元々持ってたとは思ってますよ。僕は。だけど他人への上手い共感の仕方、イベントの告知の仕方、自分の売り方かな、自分をどう売っていくかがバンドマンとして重要だと思ってるって今度こういうライブやるから来てってっていうのを口頭だけじゃなくて、ポスター作ったりだとか、SNS環境も充実してるのでTwitterでも告知したりだとか、ブログもあるのでそういうので告知するっていい

う、いわゆる自分の売り方がわかったかなってというのが1番の変化ですね。僕の中では。

Q. さっき中高生が大人になったらスタッフとして戻ってくるみたいな話があったと思うんですけど、まっきーさん自身はやりたいなっていう気持ちはあったりするんですか？

A. まっきーさん)そうですね。大学で上手くいったらたぶん僕ちょっとはあいだ空けると思うんですけどいずれは戻ってくるとおもってて、そのときは普通に来るんじゃないかと売れたバンドマンの音楽講師と呼ばれたらああ、あいつかっけえみたいになるんで、今の格好じゃなくてもうちちょっとチャラチャラした格好で来ていや、あいつ変わりすぎじゃねって感じで帰ってきたらちょっと面白いのかもねって思ったりします。けどそれも上手くいかないかな。まあ戻れるんだったらほんとに戻ってくるくるとは思います。多分。

Q. 友達とかでもそういうことを言ってる人はいますか？

A. まっきーさん) ああいます。います。僕去年の卒業した先輩、1個うえの先輩に仲良い人がたくさんいて、その中でももう既に戻ってきてる人がもう2人くらいいて、ここって結構イベントが盛んなんですけどその中でも結構受験生に役立つものとして学び場っていうのが毎週木曜日にあって、その学び場っていうのは何かって言うと、ほんとにくるフロアキャストさんたちがまあ頭の良い方粒ぞろいみたいな、東大が近いので東大のフロアキャストさんがいるんですよ。2、3人。あと早慶上智とかいわゆるほんとに僕が目指すような大学とかの名だたるところが結構卒業してる方とか、在校の方がいらっしゃるのでその方たちに学びの支援、質問コーナー、思いっきり質問攻めするみたいなことなんでこうなるの？なんでこの公式使うの？なんでこの公式じゃだめなの？みたいなことを聞くような会があってその中にもう既に戻ってきてる人が1人いて、その人は中央大の先輩だったりするんですけど。まあほんとにそこらへんの人達が教えてくれたりしてくれるとこに戻ってきてくれますね。

Q. まっきーさんがb-labを知ったきっかけはあつくんさんだったんですか？

A. まっきーさん) いや、ええと正直言うと誰かわからないです。でもたぶんいた気がします。学校の方にきてもらって、結構b-labって5年いるから分かるんですけど異動が激しくて職員さんとかも。ほんとにずっと居座れるっていうか長くいれるカタリバの職員さんでも館長だとか副館長2人だとか、言ってしまうと上位の方だとかが残っていたりして結構な異動があって、カタリバっていう就職先から変わってしまう人もいたので正直な話結構今このb-labにいる人の中でたぶん僕が最初から知っている人はほんとに少なくなっちゃってフロアキャストさんとかを含めて。ほんとにフロアキャストさんとか、大学生とかインターンの方々が長くても1年やってるかやってないかぐらいの短い感じで皆さん名残惜しそうに一緒に卒業していきます。でもたまに遊びに来ます。最初はほんとにここの館長が最初かな？誰か忘れちゃった。あとはオーストラリアに行ってしまった職員さんもいて、めちゃくちゃガタイのいい人だったんですけどその人が1番印象に残ってます。

Q. 人の異動が激しいっていう、フロアキャストさんとかはb-labの後はどこに行くんですか？

A. まっきーさん) どうなんですかね。そもそもフロアキャストさんがボランティアなので結構皆さん大学卒業だったりとかそもそも仕事をちゃんとされてる方が多くて基本的に時間の合間とかに来ていただくことが多くて、大学生の方が主なんですけどその人たちは年代が変わったりするとそのまま卒業して就職してしまったりとか、イメージ的には高3状態のまま入ってくる感じ。大学受験でそのまま大学行くのか浪人するのかとか専門行くのかとかそれに関しては人それぞれだと思います。

Q. さっきお話の中で自分のやりたいことをなんでも叶えられるみたいな話があったと思うんですけど、自分のやりたいことをどうやって伝えるんですか？

A. まっきーさん) 僕の場合は仲のいい職員さんを作るところから始めました。仲のいい職員さんだからこそなんでも喋れるみたいな環境にして、言ってしまえば大人と子供の中高生なので6年の差があるじゃないですか、上下で。上下で6年の差があるのにほんとにフラットなんです。人間の上下関係が。良くも悪くもフラットみたいな。言ってしまえば中1の子が中3にタメ口を使うだとか、今の社会だから許されることだと思うんですけど、礼儀がなってない子もいたりとかそういうことも多くて、中高生もスタッフさんとかにタメ口で話してることもあったりとかするのでよく言えばすぐに仲良くなれます。ほんとに。向こうがフレンドリーなので。なんならあれですよ。1人で利用してたら絶対話しかけてきます。最初は絶対うるさいです。最初絶対ウザいと思われます。ほんとに。

でもほんとに僕も最初聞くんですよ。スタッフさんに。むずかったでしよって。いやむずかったよって。中高生だからすぐ口に感情でてくるし。みたいな。だから最初に話しかけてすっといなくなるなんかいきなり話しかけてやだーみたいなそんな子もいるんですけど、みんな粘り強くやって。ほんとに積極的なので自分から行かなくても仲良くなれるのでそこで自分のしたいこととかあと、僕だったらライブやりたいとかそういうことを話すことができて、そっからまずどうやっていこうかみたいなことから入って、そっから具体的な話にしてって最終的にはいつ実行して、どうやって告知して、何人くらい集客するかみたいなことを一緒に考えたりします。ほんとに最初は仲のいいフロアキャストさんとかそういう人を作るのが1番だと思います。この場は。間違いなく。

Q. やりたいことを伝える機会っていうのはあんまり作られてないんですか？

A. まっきーさん) やりたい場所として提供されるのは、やりたいを発進してしまえばいずれは叶います。だから今言ってしまえばほんとに今飽和状態でやりたいイベントが結構詰まっているので順番待ちみたいな、あたらしいフロアキャストさんとか入ってきていただければその人たちが

メインパーソナリティみたいな感じでサポートしてくれるのでいい感じになってくれます。  
今はそんな感じで順番待ちです。

Q. b-1abに来る中高生たちはみんなやりたいことがあってくるのか、やりたいことが決まらずで、やりたいことを一緒に見つけていくってことはあんまりないんですか？

A. まっきーさん)それは後者の方が圧倒的にあって、実際にさっき見ていただいたらわかってもらえるようにゲームしかしない人たちばかりじゃないですか、正直な話。であとは、話してだべってるとか、本読んだりとかそういう人たちばかりなんですけど実際ここではほんとに自分のやりたいを引き出してくれます。なんだかんだ言いつつ、ゲームが好きです、ゲームをやってます、あゲーム好きなんだ、ゲーム一緒にやろよってなってゲームと一緒にやり始めた結果、おじゃあゲームの退会でも開いてみる？っていうところからはじまって、みんな参加型スマブラ大会みたいな。ほんとにここにいる人は引き出し方が上手いです。間違いなく。何度も言うとおりの形であれ実現します。ここにいる限り。ここに来てる理由がそもそもゲームやりたいって気持ちの人たちでもあります。

Q. どういうことを意識して良さを引き出してるのですか？

A. あっくんさん)働いている人のタイプが人それぞれ違う自分のやり方は割と強引な感じ。  
強引にやりつつも、やってみたいけど周りの目が気になるみたいなことをちょっとやってもいいかもという感じ(雰囲気)だったら、1回やってみる。でもタイミング的にその子がやりたくなさそうだと判断したらすっと引く。嫌がってるけど押し切ったら行ける、やり始めたらその先も進みそうと思ったら強引に進める感じですね

まっきーさん)そういうの(あっくんさんのような引き出し方)はb-1abではあまりないかな。



割と丁寧に話を聞くタイプの人が多い。

最初は強引だけど、そこから先は話を聞くか、引き下がるかの二択になる。

前提としての信頼関係はベースであるから、

お互いのことをわかってる上で引っ張ったり初対面くらいでも行けそうな子はがっと言ってから仲良くなるパターンもあるし、仲良くなってから引っ張っていくパターンもある。

ここにいる人はコミュニケーション取るのが苦手な子も自分の趣味の話をし始めると止まらなくなる子が多い。好きな物をそれぞれ持っている。

あつくんさん) こういうサポートする側でよくあるのは、変にこちら側が遠慮してしまうのを見てて思う。

話してる中でいい話題が出たのに踏み込んでいいのかなと言うのを変に躊躇して、その決意を先延ばししてしまう。

それくらいだったらいい話題がでたら、ひとまず話題を出して、本当にやりたくなさそうだったらやめる。そうじゃなかったら最初は少しずつリードして、話題を持ってきてくれたら徐々に自分(サポート側)のやることは減らしていく。それで引っ張っていたのがいつの間にか引っ張られていく方に変わっていくという関わり方にかえていくのはやった方がいい。

まっきーさん) 本当に初動だけでも手を貸してくれるのは中高生にはありがたいこと。やる機会があればみんなやる。僕が今本当にやりたいて思ってることは大学受験が終わったあとに組んでるバンドでワンマンライブをここでやりたいと思っていて、有名なバンドの曲をカバーして2時間ひたすら歌い続ける。まだあまり話せてない出来たての話なんですけど、ここは文京区以外の人はいれないけど、その時だけ見学と行って、他の地域からのお客さんをいれようかなとも考えている。

Q. さっきの説明で区外の方は予約できなくて、見学ならできるのですか？

A. あっくんさん) 基本的に使えない。いわゆるみんなの見学と同じ感じで、施設に興味があるというていで来ていて、その友達も見学ならどうぞという感じで。

Q. さっき話してたフェスみたいなものは誰でもb-labに入ってもいいんですか？

A. あっくんさん) 年3回は文京区から許可を貰って、誰でも呼んでいいという風になっている。

Q. 引っ張っていく方がいつの間にか引っ張られていく方にするのは中高生にも感じられるようにするのは、自分たちが放プロやってる中でも自分たちが主導している感じなのが不安に感じて、だけどだんだん中高生が、いつの間にか引っ張ってくれてるような環境に持っていくようにするというのが理想だと思っています。あっくんさんはどう考えてますか？

A. あっくんさん) 放プロは中高生のやりたいことを実現するというものだから、主導は中高生であるべきだから、それをサポートするのが大学生の立場。でもなんでサポーターとしているのかと言うと、ちょっと偉そうだけど、中高生よりも数年間人生経験が長いから、見える世界観だとかは多いはず。そういうちょっと先を見つつ、同じペースであったり、後ろからサポートしながら彼らのやることを自分の力で実現できるようにする。だからやりきったことも色んな周りのサポートがあったけど、自分がやりきったという感覚を持ってもらうことが1番。自分が作ったぞ！ということを経験して出来たということを実感、経験してもらえりようなサポートが必要。中高生が見えない壁を大学生がこういうことが起きるかもしれないなど少し先を見て、色んなパターンを想定してそのために必要やものこと情報を自分たちで獲得しておく。

その得た情報をそのまま直接中高生に出すでもいいし(企画の進み具合で)、もう一歩その子になら出来そうと感じたら情報の得方を教えて、その子がその情報に辿りいたり、さらにいい情報を見つけるかもしれないので、大学生は常に先のことを見つつ、でもどうするか自体は中高生

が常に決めていく。そこで大学生が決めたみたいなきょうことが起こると関係性がおかしくなったり、プロジェクトの方向性がおかしくなつてきて、大学生が主導してゐるよな感覚になつて思ふから、常に決めることは中高生にすることを絶対にして、そこの情報提供の仕方やここのこともあるかもという話題の仕方の頻度を徐々に下げていく。またそういう想定を一緒にしてみたり、想定仕方さえ分かれば進め方を自分で進めていくみたいなきょうは必要。

よくある関係性で言つと、(何か書きながら説明してゐる)大人が割とリードしてプロジェクトを進めていくけど、やり方を学んでいくことによつてその立場を逆転していく。最終的に自分たちの中高生がやりきつたことにかかわり具合や方法をどんどん変えていくことで、バランスを変えていく。均等になる所から変わつていく所が大事。大学生はそれを考えながらやるこゝが大事。

Q. 中高生にこゝうこゝやつた方がいゝかもねのよな提案を多くしてしまふのはありですか？

A. あつくんさん)みんなそれぞれ自分のやりやすい方法があると思ふ。だんだん型が出来てくる。それが合う人もいれば、一緒にゼロベースから一緒に考えたいのが自分には合うみたいなきょうがあると思ふ。自分がどのよなのがあつてゐるのか経験積みながら見つけていつてほしいし、その人の話しかける言葉や態度などで型は全然違ふから、自分に合ふよな物を見つける。

俺は割と言つちゃうタイプだけど、言い過ぎないように加減は自分の中でわかつてきてゐるからそれは出来る。その加減が分からないとそれは危ないルートかもしれない。情報提供し過ぎてどんどん引張つていつて、関係性が変わらずにイベント実施まで行つてしまつて、これ大学生のイベントじゃんみたいに思ふパターンになりうるかもしれない。

まっきーさん)中高生側からすると、取っ掛り口が多ければ多いほどありがたいに越したことはない。やり方が出てきすぎるくらいまで出してくれたの方がいゝかも。中高生はこれだけでなくて学校の勉強などもあ

るからこれだけにのめり込むことは出来ないから、正直な話、情報が多ければ多いほど、今の自分に合ったものが見つかる。

中高生の年齢であればさすがに選べる年代なので、多ければ多いほど。あとは楽しいことやってれば、やった故自分側になって来るのかなとおもう。ライブやりたいとかも、取っ掛り口が多ければ多いほど入りやすい、楽しいことやっている実感が湧いてくるからこそその楽しさが上回ってもっとやるぞ！みたいに中高やった生が暴走して止めに入るくらいの役割になっているb-labのスタッフさんは、そこに関しての心配はそんなに要らない

あつくんさん) 中高生が大学生と会う時間を楽しめるように楽しい雰囲気作りやコミュニケーションは意識した方がいい。

放プロというものに限るのなら、最初あまり主体性が出てなくても、申し込んでる時点で何かやってみたい、変えたいという思いが必ずあるはずだから、そこをちゃんと言葉に表すことは大事。そこを常に確認しながら

まっきーさん) 最近の子は趣味が多様。テニス好きがゲームプロジェクトやったり

Q. b-labに入ってくる中高生に対して説明会をする時はどういうことに気をつけているのか。

A. あつくんさん) 説明会は無いですね。放プロの説明会のことを指してるのかな？みんなが興味無さそうなら答えなくてもいいかな。答えるのにも情報が少ない。こういう説明会やってるんですけどみたいなものだったらラインで答える。

Q. なぜ利用対象を文京区だけに絞っているのか？

A. あつくんさん) これは文京区の施設だから。区の方針？b-labは文京区がお金を出しているから、そこがどうするかを決めている。大きな枠の中で我々は具体的な運営をするのが仕事で、大枠はなかなか変えること



ができない。条例に関わる問題だから、議会まで動かさないといけ  
ない。

ここは文京区の税金でまわってるから、文京区に関連しないといけ  
ない。だからほかの区の利用者が来た時には税金の対象外になるから、区  
内の人しか対象にならない。

世田谷は区長が柔軟だから幅広く使えるようにしてるのでは。

Q. b-labの運営費は区が出してくれている？

A. あっくんさん) そうそう。

Q. 区の税金はどのくらい出してくれてるのですか？

A. あっくんさん) 運営費は7000万くらい。希望ヶ丘の人はb-labのヒア  
リングして合わせていると思う。希望ヶ丘の方が若干規模が大きい。

Q. 希望ヶ丘の人とコミュニケーションをとることはあるか？

A. あっくんさん) ユースセンターは都内で少ないから、連絡会を中心に  
仲良い。希望ヶ丘館長さんとも繋がりがあがる。職員レベルだとあんまり  
...

別で首都圏のユースセンターの勉強会がある。そういうところに来る積  
極的なユースセンターの方とは繋がりがあがるけど、普通に働いている人  
とは無い。

まっきーさん) 中高生間でもあまり繋がりがあがる。

あっくんさん) ちよくちよくセンターごとの交流はある。ダンスイベン  
ト都内三ヶ所のコラボのイベントがあつた。物理的に遠い、b-labが一  
緒にできない、やるならb-labを会場にしたいから。他の施設の人にと  
ってもハードル高い。

## 感想

### 関文菜

私がb-labを見学して印象に残ったことは2つあります。

まず1つ目は自由度の高さです。施設を案内していただいている時にバンド練習をしている中高生、サクスを吹いている中高生、友達とお話やゲームをしている中高生、スタッフさんと中高生が一緒にミーティングをしていたりと様々なことをしている中高生の様子を見ることが出来ました。どの中高生をみてもみんな生き生きとした顔でとても楽しそうに自分のやりたいことをやっているということが伝わってきました。そして、施設全体を通して暖かい雰囲気を感じました。中高生が自分のやりたいことを自由に思うままにやって、それをスタッフさんが友達のようにフラットな関係でありながら支えるという素敵な関係が出来ているんだなと感じました。

2つ目は高校を卒業して施設を利用出来なくなった高校生が卒業して大人になったあとに再びスタッフとして戻ってくるというサイクルが出来ているということです。「卒業してしまってもまた帰ってきたい」と思えるほど魅力的な空間が作られているんだなと感じました。また、お話を聞いた高校生の方が強調して仰っていたのが、b-labは「やりたいことを何でも叶えてくれる」ということです。職員と中高生の壁がなく、自分のやりたいことを引き出してきて、実行することができる、口に出すことが出来るとしきりに仰っていました。

また、今回の視察ではYECのOBであるあっくんさんから放プロについての相談をしたり、アドバイスを頂くことができ、これからの活動に生かせることを多く学ぶことが出来たと同時に改めてカゴメンとしての中高生との接し方について考え直す貴重な機会になりました。中高生が素の自分でいられて、放プロの活動の場が

楽しいと思ってもらえるようにこれからも頑張っていきたいと思っています。

森俊輔

カタリバと文京区の関係性がそれぞれの事情があって難しそうでした。文京区側の担当の方が変わるとにその性質もかわってしまうことに驚きました。中高生とスタッフの信頼関係の作り方にもっと興味を持ちました。b-labで行われている年三回のフェスは楽しそうだったし、区切りとしてとてもいいと思いました。話を聞いたアッキーさんからフェスへの熱が感じられて、b-labの子たちにとってフェスは運動会みたいに大切なイベントなんだという風に感じました。b-labを訪れる目的はバラバラでも、その空間にいるだけで、自分のやりたいことを引き出してくれるというのが興味深かったです。「引っ張っていたのが、いつの間にかひっぱられてた」という感じが多いそうで、自分もカゴメンとしてそれを実感していけるようになる努力をしていきたいと思いました。アックンさんのお話から、カゴメンは、中高生が自分たちと会う時間が楽しい時間になるような環境づくりが大切である、ということを知り、雰囲気、環境づくりにカゴメンは意識を持っていきたいと思いました。また中高生とのかかわり方のバランスも大切にすることの大切さが実感できました。放プロなら、何かしら思いがあるはずの中高生の「やりたい！」の声を言葉にすることを手伝ってあげることだと確認できました。

木内あすか

私は今回このような施設を訪れるのが初めてだったため、どんな場所なのかとても楽しみでした。

この施設の特徴は、1つの施設の中に勉強・スポーツ・音楽など様々なジャンルのフロアや部屋があることだと考えました。中高生のやりたいことを支援する場として、多くの中高生が会話を楽しんでいたりと、勉強をしていたり、仲間とバンド練習をしていたりとそれぞれが自分のやりたいことを思い思いに、自由にやっていて活気を感じました。

私が最も印象に残っているのは明るく、そして温かいアットホームな雰囲気があることです。

このような雰囲気、そして自分のやりたいことをサポートしてくれる人がいるから中高生も積極的に挑戦できるのだと感じました。

また中高生の意見を施設の中に取り入れていることが良いと思いました。自分の意見が目に見える形で反映されることによって、他者から認められるということの中高生自身が感じることができます。

社会では自主性が求められます。b-labでは、普段の学校生活では実現しがたいような主体的な取り組みができ、自主性を育むことができることのできる良い場所だと実感することが出来ました。